

講評

日本語における事態の捉え方・描き方の「型」の解明とその習得に関する研究

——英語・インドネシア語・ベトナム語・タイ語との比較——

本研究は、ある事態をことばで描くとき、「行為者」と行為の影響の「受け手」のどちらに焦点を当てるか、その描写の「型」を日、英、中、インドネシア、ベトナム、タイの各言語間で比較したものである。ある事態を表す画像を各言語の母語話者各50名以上に見せたところ、英語話者は「行為者」を、日本語話者は「受け手」を主語にする傾向があり、その違いに統計的有意差が認められた。また、アジア諸語はおよそ英語と日本語の間であることが明らかになった。さらに、日本語能力試験N2以上の学習者に同様の実験を行ったところ、日本語学習が進むと、事態の描き方も日本語の「型」に近づくことが推測される結果となった。

本研究が東南アジア諸語を調査したこと、日本語習得に焦点を当てたこと、手堅い実験と分析を行っていることを特に評価したい。画像の描く事態によって焦点の当て方が異なることも考えられるので、さらに精緻な研究を期待したい。

(名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科 教授 尾崎 明人)

文章構造に基づく難易度推定と教育への活用方法の検討

本研究は、文章指導における学習支援・指導支援ツールの開発をめざしたものである。開発にあたっては、大量のデータや情報を取り込み、自然言語処理技術を活用している。そこには、多くのアイデアと労力が認められ、敬服に値する。

例えば、語彙の難易度を付与するために、国立国語研究所のコーパス2種と「新坂本教育基本語彙」のデータを利用している。両者は、異なる視点から得られたデータであり、融合するのにも工夫が必要である。それにもきちんと対処されている。

そのような多くの工夫と努力を積み重ねて、一般の教員や学生が、文章の難易度推定をできるテキストエディタを開発した。それも文章を入力してすぐに使えるということであり、効力を発揮できると思われる。

ただ、教科書データと白書データが難易度判定のベースになっている点が、少しひっかかる。両者の難易度の位置づけや評価は十分なものだろうか。その点の究明にも目を向けてほしい。

(公益財団法人日本漢字能力検定協会現代語研究室 室長 佐竹 秀雄)

小学生における漢字の形態・音韻・意味処理に対する脳活動の発達的变化

本研究は、漢字の形音義の処理の発達的变化を見るために、2-3年、4年、5-6年および成人（いずれもほぼ10名程度）に、漢字（図形）を二つ提示し、漢字の形音義の判断の正確性、処理速度およびその脳内血流を測定するものである（再認課題についても測定）。

その結果、特に低学年の読み処理の正確性が低く、処理速度が遅いこと、5-6年になるまでの段階では意味処理において音韻情報処理に関する脳部位の反応が見られ、間接経路での処理が示唆されること、などが指摘される。実験的研究として興味深い。

ただし、例えば「白、足」が四角形を含むといった表面的な見方で形態の認識を考えるが、「書き順」や字の構造といった「書く」側面の観点がなくていいのか、音韻処理でも、音訓や

読みの複数性などは考えなくていいのか（「大、台」の音読みはダイだが前者は「大きい」の方が身近ではないか）など、漢字学習の特性への理解は今後の課題と思われる。

（早稲田大学文学学術院 教授 森山 卓郎）

ループリックの作成と共有を核にした授業モデルの構築

国語科3領域の中で最も時間を割くべき「書くこと」については、指導実態が十分だとは言えず、読解の授業で自分の考えや思いを書かせているという事実をもって「書くこと」の活動を行っているという声もよく聞く。しかし、「書くこと」をコミュニケーションの一環として考えると、このような事態が肯定されることは看過できない。国語科における「書くこと」は、相手意識や目的意識を中核にしたものであり、書いた内容が人に伝わらなければ意味はないのである。

本研究では学生アンケートの統計分析により「良い文章」を定義し、そこから作成した「第1次ループリック」をもとに学生たちに文章を評価させる活動を行った。そのこと自体、書き手となる学習者に上述したような文章の本質を考えさせることを促し、低調な「書くこと」の活動を主体的にしていく大きな価値を有していると言える。しかし、研究そのものはまだ途上であり、課題の解明に至っていないという部分が大変残念に感じる。今後の実践に期待したい。

（奈良教育大学教育学部 教授 棚橋 尚子）

選考委員

尾崎 明人	名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科 教授
森山 卓郎	早稲田大学文学学術院 教授
棚橋 尚子	奈良教育大学教育学部 教授
佐竹 秀雄	公益財団法人日本漢字能力検定協会現代語研究室 室長